

# 群馬の古墳の質が高い理由

～古墳がもたらした地域社会への重要効果～

## ① 研究動機

群馬には多くの巨大な古墳があるので、古墳時代には大変栄えていたことはよく聞く。それらの巨大古墳はなんのために作り、地域社会へもたらされた利益はどのようなものであったか関心を持ったからだ。

## ② 研究方法

- ・ 本やインターネットを活用して調べる。群馬の実際の古墳の規模、使用された技術から古墳が地域に与えた影響を考察する。古墳時代の社会の様子も考慮して結論を出す。
- ・ 博物館や古墳に実際に行って実物を見る。

## ③ 仮説

大きな古墳を作ることで、地域住民の交流を促進することができたということがもっとも大きい効果だと思う。古墳は大人数で作るものだからだ。豪族にとっては豊かなコミュニティを作ることによって民衆の不満を軽減することができる、民衆にとっては生活がより充実するというウィンウィンの関係が結果的に成り立ったから、古墳時代は長く続いたのだと思う。



群馬県立歴史博物館蔵

綿貫観音山古墳・埴輪群像（馬列）

## ④ 結果

### 第1章 古代群馬の世界

#### 群馬の古墳の大きさ



上のグラフを見ると、トップ 30 に入る古墳の所在地は順位順に大阪府、奈良県、岡山県、群馬県だけであることがわかる。東日本で唯一ランクインしているのは群馬県だけであるということから、群馬県、すなわち上毛野国は東日本では最も強大であったことがわかる。上毛野国が東日本随一の強国になった理由として、政治面ではヤマト王権との関係が密接なこと、産業面では農業が盛んであり人口が非常に多かったということがあつた。トップ 30

位に入る群馬県古墳は大田天神山古墳で墳丘の全長は 210m である。大田天神山古墳には「長持型石棺」が採用されていることから、ヤマト王権と関係が深い人物が葬られていた可能性が非常に高い。



<https://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/bunkazai/otabunka44.html> より

東日本では最大、近畿地方以外の古墳では 3 番目の規模である。埴輪としては円筒埴輪のほか、家、楯、鶏や水鳥の形象埴輪も発見されている。



群馬県立歴史博物館蔵

長持型石棺（復元）

「王家の石棺」と言われ、東日本では大田天神山古墳とお富士山古墳のみで使用されている。

また、群馬には大型の古墳が多くある。墳丘の長さが 100m を超える古墳は少なくとも 20 基以上はある。下の表を見ると、古墳が大きければ大きいほど位が高く、またヤマト王権との距離が近い順に前方後円墳、前方後方墳、方墳、円墳となることがわかる。群馬の古墳は大型で、また前方後円墳も非常に多いことから、ヤマト王権との関係が非常に深い大勢力であったことが言える。

飛鳥時代前期～中期にかけての大王陵

高	飛鳥時代前期～中期にかけての大王陵			
	A. 前方後円墳	B. 前方後方墳	C. 円墳	D. 方墳
高	巨大	巨大	巨大	巨大
	大	大	大	大
	中	中	中	中
	小	小	小	小
低	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <span>箱式石棺墓</span> <span>木棺墓</span> <span>土坑墓</span> </div>			
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <span>近</span> <span>大和政権との距離</span> <span>遠</span> </div>			

<https://japan-kofun.com/katachi/> より抜粋



左側：前橋八幡山古墳

右側：前橋天神山古墳

## 早期から進んだ灌漑

古代の群馬では、農業技術が非常に栄えていた。これは、古墳時代の前期に平野の開発が非常に進んでいたからである。平野の開発の例としては、平地の水田化や灌漑がある。上毛野地域ではこの頃から前方後円墳が登場していることから、この地域の豪族は早くからヤマト王権との関わりを持っていたことがわかる。この時期の古墳としては前方後円墳の前橋天神山古墳や前方後方墳の前橋八幡山古墳などがあり、これらの古墳に葬られているのは平野の大開発を進めた指導者たちであると考えられる。

また、古墳時代は前期から組織的な労働力を派遣できる社会に成熟していたといわれている。その証拠は、前橋市にある徳丸仲田遺跡や玉村町にある砂町遺跡の水路である。4世紀後半の水路が埋没すると、現在の前橋市から玉村町を治める支配者が、前橋市から玉村町にかけて幅約5m、深さ約1.2mの大きな溝を造った。砂町遺跡では約100mが見つかり、徳丸仲田遺跡でも同様の溝が確認されている。さらに、徳丸仲田遺跡では他の大溝が確認されており、前橋市内にもいくつもの大溝があったと考えられる。これらの大溝は埋没するまで100年間使用され、この灌漑技術によって安定して食料を得られるようになった。古墳時代を支える生活基盤が確定したのであった。ちなみに、東日本にこれほど大きな灌漑施設は他にはない。



<https://www.town.tamura.lg.jp/docs/2014091808887/>

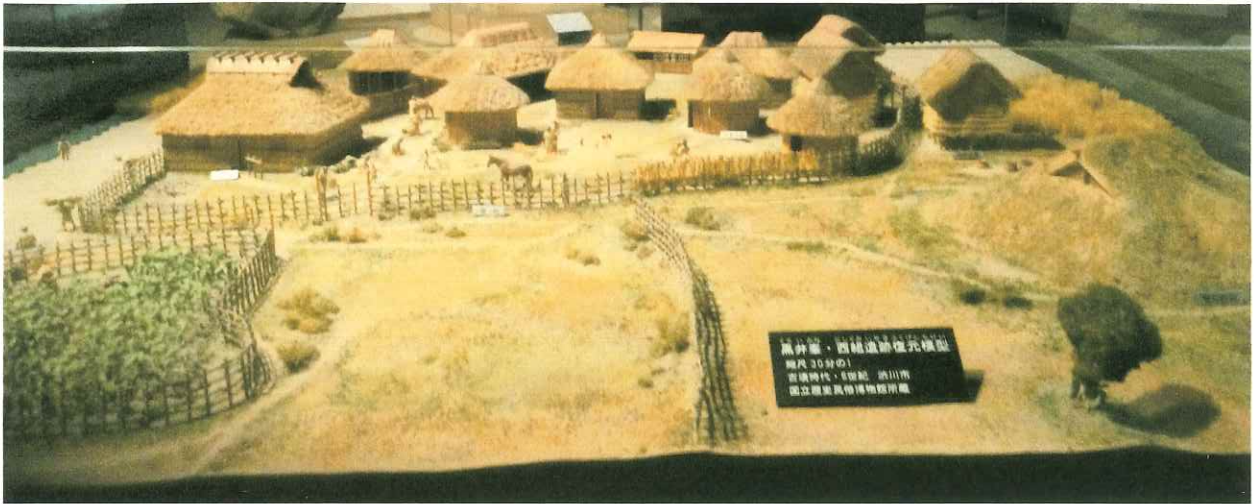
より抜粋

この写真は南東から見た用水路の様子である。

## 古墳時代のムラ（黒井峰・西組遺跡の場合）

古墳時代のムラには堅穴建物と平地建物と高床建物の3種類の建物があった。垣根に囲まれた建物群と外側の堅穴住居で一世帯とされていた。普段人々が住まうのは堅穴住居で、堅穴住居の平面形は古墳時代後半には円形から四角形になった。また、住居の端には「かまど」が備えられるようになった。「かまど」は朝鮮半島から伝わってきたもので、この登場によってより料理を美味しくできるようになった。一方、豪族たちは柵で囲まれた巨大な「居館」に住むようになった。

また、古墳時代後期からはムラに馬小屋が備えられて馬が飼育されるようになった。馬が軍事上重要なものになってきていたからだ。用水路の整備によって、馬を民間で飼育できるほど生活に多少の余裕ができていたことを示しているのではないだろうか。



上：黒井峰・西組遺跡復元模型全体

左：馬の飼育

上の写真を見ると、平地建物が過半数を占めていることがわかる。柵で覆われた部分の外側に大型の竪穴建物があることがわかる。

(群馬県立歴史博物館の模型)

## 第二章 古墳に散りばめられた宝

### 古墳からわかる文化の交流

綿貫観音山古墳から出土した銅水瓶は、日本最古のものであり、大陸からの舶製品だと考えられる。何故ならば、中国・北齊の王子型水瓶と類似しているからだ。この事実から、綿貫観音山古墳に葬られている豪族、すなわち古墳時代後期の上毛野の豪族はヤマト王権の外交においてかなり重要な役割を果たしていたと考えられている。

また、同古墳から出土した鉄冑には突起がついており、日本国内では珍しいものである。朝鮮半島では類似したものが発見されており、朝鮮の当時の有力者は冑の突起につけるものによって、身分を示していたと考えられる。

さらに、群馬県内の古墳では多くの銅鏡が発見されている。綿貫観音山古墳や前橋天神山古墳などから発見されており、特に三角縁神獣鏡に関しては群馬県内から出土した数は東日本の18枚のうち13枚を占めている。三角縁神獣鏡はあまり大きくない群馬県内の古墳からも出土している。この事実からも、上毛野地域は東国の中で最も強大であり、ヤマト王権から最も信頼を得ていたことがわかる。なぜなら、三角縁神獣鏡は中国や朝鮮からしか得られず、輸入された分はヤマト王権が配布するからだ。ちなみに綿貫観音山古墳の獣帯鏡は韓国にある武寧王陵にあるものと直径、図像が同じ「同型鏡」である。

そして、綿貫観音山古墳の石室からは食器として当時使われた土師器や須恵器が出土している。もともと死者に飲食物をお供えするという思想は日本にはなくて、朝鮮半島や中

国の思想を元に食器を副葬品としている。この地域の豪族が当時最先端の思想をいち早く取り入れていたことが垣間見える。



上段左端：銅水瓶 上段左から2番目：鉄冑 上段右から2番目：土師器 上段右端：須恵器  
下段左端：三角縁神獸鏡（前橋天神山古墳出土） 下段中央：獸帯鏡（綿貫観音山古墳出土）  
下段右端：綿貫観音山古墳

## 古墳の作られ方

大仙古墳の場合は、

①くいと縄を使って、設計図を地面に書く。

平野に古墳を作ると言っても、平坦ではないので、地面を削る必要がある。地面を測量して、設計図を書くというのは難しいことなので、当時の技術力の高さが伺える。

②表面の土を掘って、レンズ状に積み上げる。

こうした作業の痕跡は多くの古墳で見られ、古墳建造のために不可欠な作業だったのである。

③濠を掘る

堀の形に合わせて、作業を進める。掘るために使う道具は、木製の本体に鉄製のものをつけただけで機能性は低いですが、当時の最先端の道具だったのである。

④「もっこ」を使って掘った土を運び、盛土にする。

濠だけではすべての土を賄えないので、周辺地域からも土を運んでいたと考えられる。2人1組で作業を行っていたと考えられる。

⑤1.5mの高さに水平に積んでいく

運ばれた土を山のように積み、山と山の間を埋めることで水平な層になる。この作業を繰り返していく。

⑥近くの斜面で埴輪を焼く。

古墳近くの斜面を利用して多くの竈が作られた。粘土や燃料のまきが大量に運ばれた。

⑦斜面に石を差し込んで積む

石の大きさは大体拳2個分のものが主体だと考えられ、基底や作業単位の基準となる場所にはさらに大きな石が使用された。石は掘削中の土や周辺から調達された。

⑧後円部に穴をほり、石棺を入れる。

⑨石棺の内部や周囲に副葬品を飾る。



保渡田古墳群・保渡田八幡塚古墳

## 重さトン級の石

古墳の石室に使われている石は綺麗な形をしている。次ページの写真のように、石室に使われる石たちは積めるように四角形に磨いてある。これを見るだけでも、古墳時代の石材加工技術はかなり進んでいたことがわかる。

また、6世紀後半に築かれた綿貫観音山古墳の石室には様々な石が使用されている。石室の側面には6世紀前半に榛名山が噴火した時に噴出した角閃石安山岩が使用されている。角閃石安山岩が使用された理由は柔らかいので、加工しやすいからである。これらの石はブロック状になって積まれている。ただ、このように大きな石は綿貫観音山古墳の周辺では存在しない。この石は榛名山から利根川に流れているので、利根川なら採取は可能である。これらの石は利根川から数kmも陸路で運んでいたとされている。

そして、この古墳の石室の天井に使われている最も大きな石は22トンあり、10トン超えの石が他に2つ使用されている。これらの石は藤岡市西部の鮎川から採取されたものを運搬してきたと考えられている。このような大きな石を運搬する時に使われた道具は「修羅」である。「修羅」は大型の木製のソリである。この道具で巨石を古墳まで運んできてい



左上：綿貫観音山古墳石室

右上：前二子古墳（大室古墳群）石室

左：蛇穴山古墳石室（方墳）

どの古墳も石室に使われる石がとて大きくて驚いた。  
また、蛇穴山古墳の石室に関しては四角形の石が精密で、大変美しいと感じた。



←修羅 (<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/214159> より)

大阪府三ツ塚古墳出土

## ⑤ 考察

古墳が地域社会にもたらした重要な効果は3つあると考えた。1つ目は住民への富の分配である。古墳の築造において、石を運んだり土を掘ったりすることは重要な作業である。ただ、このような作業には危険も伴うし、厳しい気候条件の中で作業を行うこともあるだろう。そのため、作業員である住民にはある程度の褒美がなければ、割に合わない。そこで、古墳の建造に参加してくれた住民には給料を払っていたと思う。当時は貨幣がなかったので、給料はコメだったと考えられる。古墳の建設に参加すれば、貴重な食料であり財産でもあったと考えられるコメを手に入れることで、収入の足しになり、生活に少しでも余裕ができるかもしれない。住民はこのような期待を持って、一世一代の大イベントに参加していたのだろう。中には用水路の開発を進め、コメの生産量を増やした豪族に対する感謝の気持ちを持って、古墳建造に参加した人もいるかもしれない。

給料の支払いの可能性を裏付けるものとして、エジプトのピラミッドの建設の事例がある。労働者にビールとパンを支払っていたという記録があり、ピラミッド建設は農閑期の



公共事業だと考えられている。上毛野地域の豪族は大変強大だったので、仮に参加者が多くても全員分の給料は余裕で支払うことができただろう。大山古墳の建設に参加者の最多が技術指導者も含めて3000人だったと考えられていることから、その約3分の1の規模である群馬の大型古墳の建造の参加者は1000人くらいだったと考えた。

2つ目は地域の活性化である。県内の古墳の石室には大型の石がかなり使われている。これらの石は木製ソリの「修羅」によって数kmも運ばれていた。大型古墳の築造は一代に一度の巨大イベントであり、特にこの石運びは古墳築造のメインイベントとして住民にも公開されていたのだろう。この根拠は1000年ほど後の戦国時代にあると考えた。織田信長は京都に御所を作るときに、大きな石が献上されると、石運びそのものを祭りにしている。

具体的には、大きな石を「綾錦<sup>あやにしき</sup>」と呼ばれるきらびやかな布で装飾を施し、その上に若衆や着飾った女性を乗せて、鳴り物を叩いて人々が引き綱を引っ張るといったものだ。ここまで行かなくても、石運びというのは人々が興奮するようなイベントであり、この話題は地域で共有されていたのであろう。数十年に一回しかない大行事を行う地域は数十年に一回という大盛況だったのである。さらに、多くの地域からたくさんの人が集まり、様々なものが交わり合うことで、各地域の関係を統合したことも活性化に繋がったのである。

また、住民は自分たちの地域の豪族のステータスをこの石運びや古墳の大きさを通して知ることができたのだろう。このような大きな石を運び、また大きな古墳を築ける豪族の力を知った住民たちは自分たちの地域のことを誇りに思っていたと考えられる。

3つ目は技術の進歩や最新の思想に触れられるということである。古墳づくりには設計図を地面に書くとい高難度の技術や、濠を掘る時に使われた最新鋭の鉄のスコープといった時代の最先端をゆく技術がちりばめられていたのである。さらに、上毛野はヤマト王権との結びつきが非常に強かったので、前述した巨石運び、石棺を作るといった作業に関してはヤマト王権の指導を特別に受けられる立場にあり、また中央から工人が派遣されたのである。こうした最新技術は民間でも生かされたと思うし、のちの奈良時代の寺院の建立にも生かされたと考えられる。

また、県内の古墳の副葬品には朝鮮や中国のものと似た銅水瓶や鉄製の武具、銅鏡や須恵器など外来の製品が多く見つかっている。また、製品だけでなく死者にお供えをするという新たな思想も古墳に取り入れられている。このように、古墳は最新鋭のものの実験場であり、当時の技術水準の向上に役立ったのではないかと思う。

このような考察から、仮説として挙げた地域住民の交流の促進は古墳建造による重要な効果ではないと判断した。



写真はいずれも綿貫観音山古墳から出土した金銅製の馬具（群馬県立歴史博物館蔵）

## ⑥感想

古墳そのものや副葬品、石室から様々な事柄を考えることは大変充実感があり、楽しい作業だった。古墳を通して歴史の奥深さや面白さに触れることができたと思う。古墳時代は大変地味な時代だと思いがちだったが、当時の群馬県においてはさまざまな交流があった活発な時代だったのではないかと知り、新鮮な驚きがあった。今後もさらに古墳の不思議を探求していきたい。

### 参考文献・調査した場所

現地調査：群馬県立歴史博物館 前橋天神山古墳 前橋八幡山古墳

参考文献：東国文化副読本（2019年版）

PHP 文庫 学校では教えてくれない戦国史の授業 裏切りの秀吉 誤算の家康

著：井沢元彦

つながる歴史

【発表!!古墳の大きさBEST30】ピラミッドより大きいお墓が日本には存在する!?

<https://www.rekishijin.com/12201> 7/27

太田市 | 天神山古墳

<https://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/bunkazai/otabunka44.html> 8/2

古墳の形にはどんな意味があるのか

<https://japan-kofun.com/katachi/> 8/2

北部公園案内（砂町遺跡） | 玉村町

<https://www.town.tamamura.lg.jp/docs/2014091808887/> 8/4

竪穴住居にカマドや貯蔵穴が登場（古墳時代）

<https://www.city.mishima.shizuoka.jp/ipn038464.html> 8/6

着手から埋葬まで20年！大仙陵の作り方を徹底解剖① | BEST TIMES

<https://www.kk-bestellers.com/articles/-/2506/> 8/6

着手から埋葬まで20年！大仙陵の作り方を徹底解剖② | BEST TIMES

<https://www.kk-bestellers.com/articles/-/2507/> 8/6

現代技術と古代技術による仁徳天皇陵の建設 | 李刊大林-大林組

[https://www.obayashi.co.jp/kanan\\_obayashi/detail/kanan\\_20\\_idea.html](https://www.obayashi.co.jp/kanan_obayashi/detail/kanan_20_idea.html) 8/7, 8/8